

所 報

愛知東邦大学地域創造研究所

2012.3 No.17



危機に備える地域の力

地域創造研究所長
愛知東邦大学人間学部教授

御園慎一郎



日本社会の少子化・高齢化がどんどん進んでいる。わが国は平均寿命、高齢者数、高齢化のスピードという三点すべてで世界一だ。人口ピラミッドを経年で追ってみるとかつては二等辺三角形であったものが釣鐘型になり今では壺型になっている。働く世代の人口が減って支えられる人口が増加している姿が浮き上がっている。その上少子化で子どもが減っているのだからこの社会の将来をどう支えてゆくのか不安にならざるを得ない。さらに、昨年からの団塊の世代への年金の支給が始まった。当然のことながら今後はこれまで以上に年金、医療、介護という分野への財政需要は急激に拡大する。社会の担い手が減少する中でシルバー世代への給付の増加。わが国社会は極めて重大な危機に直面している。ところがこの危機はその影響がゆっくりとしか訪れない。緩慢なのだ。この危機はすでにずっと以前から指摘され、その対処が求められてきた。しかし、我々は緩慢であるがゆえにまだ大丈夫だろうといって問題を先送りしてきてしまった。その間にもこの危機は進行している。

一方、我々社会は天変地異というもう一つの重大な危機に直面している。少子化・高齢化という危機が緩慢な危機だとすれば、地震災害などの天変地異は突発的に発生する。

本来我が国は災害大国である。地震、それに伴う津波、台風、洪水、噴火、雪害。特に地震は歴史をひもとけば幾度となくその猛威を振るい甚大な被害をもたらしてきた。まさに我が国は地震列島なのだ。ところが、戦後の高度経済成長期を含む20世紀後半は歴史上まれにみる大地震の静謐期であった。しかし、阪神淡路大震災以降、21世紀は再び地震の活動期に入ったようだ。東日本大震災もその一環であって、今後、首都直下型地震、東海・東南海・南海地震、あるいはそれらの3連動地震などの確実な発生が予測されている。そしてそれらが起こったとき、我々の社会はさらに深刻な事態に立ち至るのである。

このように、我々は少子化・高齢化という緩慢な危機と巨大災害の発生という突発的な危機が進行する中で生活している。我々はこのことをしっかり認識し、危機が現実のものとなった時に対応できる社会システムを構築しておかなければならない。その際に考えなければならないこと、そして一番大切なことは生活している地域の人々のつながりであり、お互い支えあうという地域の力だと言えるだろう。少子化・高齢化、そして巨大災害という危機の時代を乗り切るキーワードはやはり「地域の力」なのである。

contents

【巻頭言】	「危機に備える地域の力」 御園慎一郎……………1
【部会報告】	「地域スポーツ研究部会報告」 石川幸生・杉谷正次……………2
【11月講演会報告】	「観光庁長官 熱弁を振るう」 御園慎一郎……………3
【震災関連研究会報告】	「『東日本大震災』と地域を考える」 御園慎一郎……………4・5
【第5回下出文庫シンポジウム&資料展】	「第二次大戦前・戦中・戦後雑誌展開催」 森靖雄……………6
【書籍紹介】	「地域創造研究所の近著2冊」……………7
【地域の話題】	「まちの縁や魅力を知る」 別所眞三……………8
【地域創造研究所 2011年度の主な活動】	……………8

地域スポーツ研究部会報告

地域スポーツ研究部会
愛知東邦大学人間学部教授
石川幸生
愛知東邦大学経営学部准教授
杉谷正次

今年度の研究活動は、「認知症予防活動としてのニュースポーツ『クロリティー』の効果に関する研究」を研究テーマとして、研究会を9回開催した。また、実施調査については、豊田市（6月）、鳥根県松江市（8月）、あいち健康の森（10月）を実施した。そして、その研究成果を第53回日本老年社会科学会及び第26回日本老年精神医学会（東京）で研究発表し、さらに本学紀要『東邦学誌』（第40巻第1号）に論文として著した。

さて、本研究部会では、今日的な課題の一つである認知症予防活動として有効であると言われている運動習慣に着目し、高齢社会において増加する認知症を減少させる支援対策を開発することにねらいがある。具体的には、地域づくりの一つの手段としてのニュースポーツ「クロリティー」が、認知症予防・進行防止の効果にどのように影響を与えているかについて検討した。

本研究会で行った研究では、①2009年に開催された老人スポーツ大会の参加者を対象とした認知症スクリーニング検査において認知症として疑われる人がいなかったこと、②地域の高齢者を対象に2006年に実施した認知症スクリーニング検査において参加者の6.3%に認知症が疑われたが、社会交流の観点から考察を加えると、高齢者同士の交

流がさかんな地域では認知症が疑われる人が0%であったこと、③社会的活動として「クロリティー」を楽しんでいるソーシャルキャピタル研究においては、地域への信頼度、地域活動への参加が多い地域ほど、健康度が高かったことなどの研究結果を得た。

そこで、これらの研究結果を踏まえ、本年度の共同研究では、広く国内外に認められつつある「クロリティー」を採用した地域づくりが認知症予防活動としてどのような効果が期待できるか、日頃クロリティーを行っている高齢者やクロリティー大会に参加した高齢者から、生理、心理、社会的側面から検証を行った。現在、その研究成果を叢書『超高齢社会における認知症予防と運動習慣への挑戦－高齢者を対象としたクロリティー活動の効果に関する研究－』と題して執筆した。



第21回 県クロリティー選手権大会



第38回 県老人スポーツ大会



第21回 県クロリティー選手権大会



地域創造研究所長
愛知東邦大学人間学部教授
御園 慎一郎

観光庁長官 熱弁を振るう

去る11月8日(火)に、愛知東邦大学、フレンズTOHOそして地域創造研究所の主催で『愛知東邦大学開学10周年記念講演会』が、溝畑宏観光庁長官を講師に迎えてホテル名古屋ガーデンパレスで開催されました。

溝畑長官は自治官僚から大分県庁に出向中に大分県の活性化のために様々な活動をされました。2002FIFAサッカーワールドカップの大分への招致やJリーグの大分トリニータの創設・育成などは特に御紹介したい成果といえるでしょう。『大分の人に元気を』という彼の情熱がサッカー文化のかけらもなかった大分の地にサッカーの大きな花を咲かせたのです。ワールドカップの開催地として世界の注目を集めたこと、また、全くゼロからのスタートだった大分トリニータがチーム発足13年目にしてヤマザキナビスコカップを制して日本のチャンピオンになったことは地域づくりの視点からも特筆すべきものです。

地域を元気にすることが日本を元気にするのだという彼の熱意を買われて観光庁のトップに就任してからも精力的に活躍しています。東日本大震災で観光需要が落ち込みそうになるのを見るやすすぐさまアジアの国々を訪問して日本の安心・安全をPR。また、震災で東北の地域観光がおかしくなるとの危機感から余震の続く東北各地を自ら激励に回って活性化を図るなどとまさに東奔西走の毎日です。

そのような大変厳しいスケジュールの中、東京からのとんぼ返りの日程で名古屋にお越しいただき、観光で日本の地域を元気にするという持論を展開していただきました。

講演では、観光は国民全員が参加できる総合型戦略産業であり、それを現実のものとなり成果をあげるためには、国民一人一人が自分の住んでいるところに誇りを持つこと、愛すること、人生を楽しむこと、そしてローカルの中にグローバルな視点を持っていることが必要だと述べられました。

また、観光庁の歴史は浅いが、その施策はすべての分野に及ぶものであり他省庁、地方公共団体や民間と連携をとりつつ新しい戦略を立てていくことを目指しているとのことでした。その中で、新しい観光アイテムの創造に関して、映画、アニメ、ファッション、食文化、産業と並んで大学も観光アイテムだと指摘。具体的には大学の授業、入学式、卒業式そして学

園祭もアイテムだということです。さらにスポーツと観光業との連携はこれから発展させる可能性を大いに秘めているということも述べられました。

観光振興には魅力ある地域に密着した観光資源を作るために、観光業界、地方公共団体、商工会、農協、大学などの関係機関のネットワークが形成されることが必要で、この中でキーとなるのは大学であるとしてその果たす役割に期待を表明していました。

最後に改めて、総合的戦略産業である観光の振興を通じてみんなが知恵を出して日本の魅力を掘り起こし、そのことによって地域が元気になり、そして日本が元気になってゆくことの必要性を訴えて講演は終了しました。

講演の後、地域創造研究所長の私とのトークセッションを行いました。その中で、溝畑長官は東日本大震災が彼の感じていた日本社会のもつハングリー精神の欠如を払拭するきっかけになればという期待を述べられました。さらに、逆境をどう克服するのかが問題だとして、あきらめないこと、大きい目で見てゆくこと、チャレンジしてゆくことが大切という彼の生き様を披露してくれました。そして最後に、東日本大震災の被災地に関して、被災地に是非足を運んで欲しい、そしてその正しい姿を伝えて欲しいと訴えられて講演会を終了しました。



講演会



トークセッション



地域創造研究所長
愛知東邦大学人間学部教授
御園慎一郎

「東日本大震災」と地域を考える

2011年3月11日14時46分18秒、宮城県牡鹿半島の東南東沖の海底を震源として発生した東北地方太平洋沖地震は、日本における観測史上最大のマグニチュード9.0という巨大な力で日本の大地を揺るがしました。そして、この地震とそれに伴う大津波によって、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部は壊滅的な被害を受けてしまったのです。さらに、地震と津波による被害を受けた東京電力福島第一原子力発電所では、全電源を喪失して原子炉を冷却できなくなり、大量の放射性物質の漏洩を伴う重大な原子力事故を引き起こしました。その結果、周辺一帯の福島県住民のみなさんが長期の避難生活を強いられていることをはじめとして、その後の放射能汚染問題は我が国のみならず全世界に深刻な影響を与えています。

この大災害の直後から被災地に対して日本各地だけでなく世界中からの支援の手が差し伸べられました。また、地震直後の被災地の皆さんのとった、秩序正しく整然と救援を待つ姿が世界の人々から多くの驚きと、賞讃の声をいただいたことは記憶に新しいところです。この支援の輪は被災地が再び力強く活動をしてゆくまで息永く続いてゆくことが必要ですし、支援の内容は復興を目指して努力をされている地域のみなさんの実情に応じたものでなければなりません。

さらに、今回の巨大地震災害は決して他人事でないことも肝に銘じなければなりません。我々の生活する東海地域は、東海、東南海、南海地震やこれらの連動型地震が近い将来確実に発生すると予測されています。

私たちが今後、東日本大震災の被災地のみなさんにどのような支援をさせてもらうのが適切なのか、さらに、我々の問題として、東海、東南海、南海地震に対する防災対策を講じる上でも、災害が発生した現地の状況を把握することはきわめて重要なこととなります。さらに防災対策としては大学も地域の一住民として地域住民のみなさんと連携をとることが欠かせません。

このような観点から地域創造研究所としては、被災地で支援活動をしてこられた方々のお話を聞き、今後の我々の支援活動のあり方を考えることと合わせて我々の防災体制のあり方を考えるための場を定期的に設けてきました。

第1回「東日本大震災」研究会

第1回目は5月27日(金)に大学のA203教室で地元の皆さんや本学の学生、教職員など85名の方の参加を得た報告会を開催しました。講師は、災害直後に現地入りして生存者の救出、遺体の搜索などに当たられた名古屋市消防局のレスキュー隊長、瀬瀬吉博氏。「東日本大震災—この目で見えた被災地の姿—」と題してプロの目で見えた被災直後の現地の模様のご報告をいただきました。派遣先の宮城県亶理町荒浜などでの人命救助、行方不明者の搜索活動の状況では水没したままの地区で遺体を発見された時の模様をはじめ通常の報道では触れることのできない搜索活動の模様を多くの映像を駆使して伝えてもらい被害の凄まじさを改めて認識しました。報告の中の「搜索中にも津波警報が出る。ライフジャケットを着けて津波が来たら流されることを覚悟していた。僕らはいつも腹をくくって仕事をしている。」という言葉が今も心に残っています。そして、教訓として『労を惜しむな(津波警報が発令されたら避難所にすぐ向かう)』、『オーバートリアージ(災害の被害の程度を実際よりオーバーに判断する、まだ大丈夫だと判断しない)』、『備えあれば憂いなし(常日頃から避難所の場所を確認するなどの準備しておく)』という三点の心構えを伝えていただきました。その後被災直後に食料を届けに行かれた平林さんからの報告もお伺いした後、参加者との意見交換がなされ、意義ある報告会となりました。

第2回「東日本大震災」研究会

第2回目は7月15日(金)東邦高等学校オーバルランチルームをお借りして地元の皆さんや本学と東邦高校の学生、生徒、教職員など84名の方の参加で実施しました。講師はNPO法人レスキューストックヤード代表理事の栗田暢之氏と東邦高等学校商業科助手の馬場美佐子氏のお二人にお願いしました。

レスキューストックヤードは1995年の阪神・淡路大震災を契機として栗田氏が立ち上げた被災地支援ボランティアのための団体です。今回の災害にも発生直後から積極的に支援活動を展開されてこられました。研究所の要請に快く応



第2回「東日本大震災」研究会

じていただき『東日本大震災とボランティア』という題でボランティアとしての被災地支援の関わり方をお話いただきました。栗田氏は、まず、災害復旧の行政や民間の仕組みの変化に触れられて、かつて公共的施設は行政、私的財産は地縁・血縁の力で私人が行うという棲み分けだったが、災害の甚大化や少子高齢化の進展で従来の仕組みが機能しなくなる中でボランティアの活動が拡大し行政とも連携するようになってきたことを説明されました。その上で今回災害現場に入られてご覧になった一般には正確には報道されていない現地での悲惨な実例や物資不足などから生じる事態を伝えていただきました。また、避難所や仮設住宅での生活に触れつつ被災された方々の精神的ケアの大切さと難しさも教えていただきました。そして、日本が地震大国であることをしっかり認識することが大切だということ、さらに、災害の現場は想像以上に厳しいということ、災害対応は行政だけでは限界があるということ、これらのことを踏まえてボランティアを含めた住民サイクルを作っていくことの必要性を教えてくださいました。

馬場美佐子氏は高校の生徒と一緒に現地でボランティアをされるなどの体験を踏まえる中で、生徒の感想文を披露しつつ生徒たちが現地でのボランティアを通じて、ただ普通の生活のできることのありがたさ、一日一日生きることができるのが奇跡なのだという気づきがあったことを披露してくださいました。

盛りだくさんの内容で、あっという間に過ぎた勉強会でした。

第3回「東日本大震災」研究会

第3回目は10月21日(金)東邦高等学校オーバルランルームで地元の皆さんや本学と東邦高校の学生、生徒、教職員など61名の方の参加で行いました。学園関係者で被災地支援ボランティアに参加したみなさんなどからの報告会と



第3回「東日本大震災」研究会

いう形をとりました。最初に被災地である岩手県山田高校教諭の山本友里恵氏から寄贈いただいた山田町の被害の記録映像を放映し、続いて東邦高校の水谷光博教諭と安藤彰悟君、秦崇倫君から現地でボランティア活動をした高校生の活動内容とその感想の報告をしてもらいました。続いて大学生協ボランティアに参加した本学の田中翔太さん、清水咲さん、酒井雅之さん、伊藤美穂さんの四名から参加の動機や支援活動の内容、感想などの報告をもらいました。活動内容としては炊き出し、清掃、子供の世話や瓦礫の撤去、泥だしなどだったとのことでした。そして、津波が来たらできるだけ高いところに逃げる、地域の結束が欠かせないこと、ふるさとを大切にすること、行ってみなければ何も分からないこと、被災地の人が皆元気で明るいことなどを学びまた感じてきたとのことでした。また、教訓として現状を知ること、周りの人々を大切にすること、時間を大切にすることの大切さを学び、またボランティアの体験から相手と時間を共有すること、相手の目線に合わせること(被災地、被災者と呼ぶべきではない)ボランティア経験を伝えていくべきこと、あきらめないという心の大切さなどを知ったと語ってくれました。最後に本学関係者でボランティアに参加した岡部一明氏からはボランティア参加の経緯や参加の仕組みについて、また森靖雄氏はスライドを使って活動の状況を、さらに宗貞秀紀氏からは、支援は継続的に続けるべきであるとの訴えをいただきました。

本研究所としては今後も東日本大震災のもたらした様々な課題を、被災地の支援という側面と我々が生活する地域社会の防災力の強化という二つの側面から捉え、より良い地域社会を構築するための検討とそれを踏まえた提言を引き続き行なってゆくこととしています。

第二次大戦前・戦中・戦後雑誌展開催

地域創造研究所顧問
森靖雄

大学祭で賑わう11月19日(土)午後、愛知東邦大学のA205教室で一味変わった雑誌展示会とシンポジウムが開かれました。

当学園には、初代理事長であった下出義雄氏が寄贈された、1930年代から戦後へかけての日本や外国の雑誌が487種類、約7,300冊所蔵されています。その中には、アメリカの写真週刊誌『LIFE』などが戦前に引き続いて戦時中も送られてきていたり、名古屋で発行されていた全国版経済雑誌『産業之日本』が揃っていたりします。また今も発行されている「サンデー毎日」や「エコノミスト」などが、戦時中は名前を変えさせられて発行されていた経過も実物で見ることができます。

今回の資料展では、第二次大戦中とその前後を中心に約200冊の雑誌を展示して、『LIFE』を榊直樹本学園理事長、『産業之日本』を元愛知東邦大学教員の安保邦彦先生、そのほかの週刊和雑誌を書店経営者で名古屋文化の研究者でもある木村直樹氏に解説していただきました。

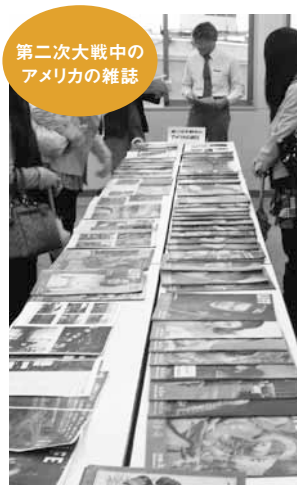
『LIFE』は、戦時下にもかかわらず「敵国」であった日本の購読者へも送り続けられていたことや、豊かな食生活や半裸の女性も登場するレビュー、戦争相手国を含む各国の報道写真など、当時の日本の雑誌記事との違いが一目瞭然でした。しかもこうした雑誌を、一民間人であった下出義雄氏(当時、東邦商業学校理事長 兼 現大同特殊鋼社長)が継続的に入手されていたことも驚きでした。

『産業之日本』は、名古屋で発行されていた経済雑誌ですが、今のところ国立国会図書館にも各大学図書館にも見当たらない珍品です。全国誌ですが1930年代から40年代へかけての名古屋の産業界にかかわる記事が多く、当地方の産業研究にも貴重な情報を提供しています。残念ながら欠号もありますが、本学園の下出文庫には48冊が揃っています。

和雑誌では、開戦前後から急速にページ数が減ると共に、記事も軍や政府高官の戦争遂行の精神論一色に変わる様子が現れています。併せて、英語を含む表題が漢字名に変えられました。ところが、『エコノミスト』は『毎日経済』に改題したが、『ダイヤモンド』は『金剛石』という雑誌があったために改題を免れたエピソードなども紹介され、参加者どうしの議論も盛まりました。



多くの社会人が参観に訪れて話題が盛上がる



第二次大戦中のアメリカの雑誌



戦前・戦中に名古屋で発行されていた経済雑誌



第二次大戦中の日本の雑誌



卒業生も興味深げに閲覧

第5回下出文庫シンポジウム・同資料展で展示された、戦時中とその前後の雑誌類

地域創造研究所の近著2冊

地域創造研究叢書No.15

『学士力を保証するための学生支援 —組織的取り組みに向けて—』

(唯学書房 2011.3.31)

本書は、愛知東邦大学地域創造研究所に、2008年度からの2年間設置された「学生支援の質向上研究部会」において、学生支援の質を向上させるための組織開発に関する研究として進められた取り組みをまとめたものです。特に、学士力を保証するという観点からの組

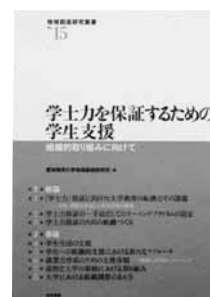
織的な取り組みを模索しました。

本書は2部から構成されています。第1部では総論として、学士力保証という考え方が出てきた経緯、学士力を保証するための学生支援の意義、学生支援を進めるための組織づくりについて述べています。第2部では各論として、学生生活の支援、学生への組織的支援におけるアプローチの例、学士力に密接に関わる「就業力」を育成するためのインターンシップの支援体制、高校と大学の接続への取り組み、組織マネジメントにおける組織調整のあり方について述べています。

それらは一貫した調査報告ではなく、本研究部会において行った文献研究と事例研究、各自が自身の関心で進めてきた研究等が混在しています。したがって、いわばオムニバスのような形態となっています。しかし、大学にも成果保証が求められるようになってきた昨今、実際に組織としてどのように取り組むかについては、それぞれがいくつかの示唆を提供するものになっていると思われます。

本研究部会は、若干変更しながら以下のメンバーで進められました。大勝志津穂、手嶋慎介、(愛知東邦大学経営学部)、照屋翔大、長谷川望、堀篤実、矢藤誠慈郎(愛知東邦大学人間学部)、松村幸四郎(現:阪南大学)、成松美枝(現:聖隷クリストファー大学)、所智子、二宮加代子、増田貴治(愛知東邦大学事務部)、室敬之(現:星城大学事務局)です。本書は、それぞれからのさまざまな貢献の集成として上梓するものです。相異なる領域、相異なる職種をこえた協働へのこの試み自体が、本学における組織開発の一部となっていることを願っています。

関係各位のご指導を賜うことができれば幸いです。



地域創造研究叢書No.16

『江戸時代の教育を 現代に生かす』

(唯学書房 2012.1.31)

本書は「江戸時代の教育を現代に生かす」というタイトルをつけた。優れた子育て・教育が行われ、能力の高い子どもを育てた江戸時代に、現在、起きている色々な教育課題を解決するヒントを求めて書かれたものである。執筆者は「名東の寺子屋研究会」のメンバーで、研

究会が進めてきた2年間の成果でもあり、見学研修の報告も付記されている。

内容は寺子屋・私塾が現代に持つ意味と歴史について、「寺子屋・私塾の現代的意義—私の体験的教育論」「寺子屋の歴史—儒教教育を中心に」(荒川紘)。人が健康に生きるということとは普遍的であるということを再確認した、「江戸から考える心とからだの健康—貝原益軒の『養生訓』」(澤田節子)。現代の経営的教育を考えるために吉田松陰との比較から、「現代日本の経営学教育の現状と課題—近世日本の商業教育との比較をつうじて」(高橋衛)。江戸時代の外国語学習と教育について、名古屋に現存する写真資料を添えた「江戸時代の外国語事情—蘭学から英学、そして開国へ」(西崎有多子)。江戸時代の子育て書からその実際と現代に生かすことができるポイントをあげた「江戸時代の育児書からみた子育て」(古市久子)。幼い頃からのしつけが健康教育そのものにつながることを読み取った「『和俗童子訓』からみた江戸の子育て」(澤田節子)。

最終章は寺子屋の史跡の調査報告となっているが、この記録からも江戸時代における教育の信念と熱心さが伺える。日本最古の郷校として岡山県備前市の「閑谷学校」、日本最大の私塾として大分県日田市にある広瀬淡窓の「咸宜園」、三重県松阪市にある本居宣長の「鈴屋」の3箇所について、写真とともに掲載している。西洋的な教育に一掃されたと見える江戸時代の知恵がどのようなものであったかを、今一度蘇らせて、我々現代人が忘れていたことも含めて、新しい時代に伝えていくべき知恵を得たいと考える書である。



まちの縁や魅力を知る

名東区長 別所眞三

昨年9月、区役所1階ロビーで、名東区内の幾つかの地点の風景、昭和10年代～50年代と現在を対照した写真展「名東今昔」を展示したところ、区民の皆さまに大変好評であった。

往時の旧猪高村役場、香流川に放牧される牛、古い家並みの高針街道、藤が丘駅前の名東区開設記念パレード風景などと、現在を対照した写真展である。

「名東区は、若いまちと言われるけど、こんな時代もあったのか」、なつかしいとの声が多かった。

今年2月には、旧猪高村のルーツともいべき猪高小学校が、大正元年に開校以来、創立100周年という大きな節目を迎えた。

猪高地区は当時1小学校しかなかったので、昭和36年西山小学校が分離するまでは、誰もが猪高小学校OBであった。

まちのルーツや縁を知ること、我がまちの魅力をj知ること、自分のまちへの愛着への旅となると思う。

名東区の歴史は、猪高中学校の教員でもあった郷土史家小林元さんによる「猪高村物語～名東区の今昔」などに詳しく紹介されている。

ちなみに、江戸時代、この地域は、猪子石村、高針村はじめ、7つの村で成りたち、水田や畑、山間丘陵地が大半を占め、主として、農業で生計が維持されていたが、その後、猪高村時代も、代表的な純農村であった。

昨年11月3日、猪高緑地一帯で「いたかの森自然王国」という環境イベントを開催したが、実は、猪高緑地こそ、里山・ため池を有する旧猪高村の原風景である。

また、同日開催された駅ちかウォーキングでは、柴田勝家ゆかりの明德寺や、神蔵寺・貴船神社など歴史ある神社仏閣めぐりが好評であった。

私たちは、日頃、我がまちの歴史・縁を意識せず過ごしているが、そこにまちとしての大きな魅力が眠っている。

小林元さんの後を継ぐ「語り部」を育て、まちの縁・魅力を発掘、発信していく努力が、とても大切であると思う。



名東区開設記念パレード

地域創造研究所

2011年度の主な活動

- 2011年 5月 24日 地域創造研究所第11回総会
- 2011年 5月 27日 第1回「東日本大震災」研究会（於：愛知東邦大学）
- 2011年 6月 30日 第35回研究会「2年次キャリア準備プログラムの実践報告～ポートフォリオの活用事例～」(報告 小柳津久美子氏)
- 2011年 7月 15日 第2回「東日本大震災」研究会（於：東邦高等学校）
- 2011年10月 21日 第3回「東日本大震災」研究会（於：東邦高等学校）
- 2011年11月 8日 第10回講演会「観光立国の実現に向けた取り組み―地域からの視点を踏まえて―」
愛知東邦大学開学10周年記念講演会（於：名古屋ガーデンパレス）
- 2011年11月 19日 東邦学園 下出文庫シンポジウム（通算5回目）、所蔵資料ミニ展示会開催（於：愛知東邦大学）
- 2011年11月 25日 第36回研究会「高濃度人工炭酸泉について～現在と今後の展望～」(報告 中野匡隆氏)
- 2012年 1月 31日 研究所叢書No.16『江戸時代の教育を現代に生かす』刊行
- 2012年 2月 11日 第4回「東日本大震災」研究会／共催：名東カルチャーゾーン構想、後援：名東区役所（於：東邦高等学校）
- 2012年 3月 12日 研究所所報No.17発行
- 2012年 3月 21日 研究所叢書No.17『超高齢社会における認知症予防と運動習慣への挑戦』刊行

※その他、各研究部会主催による研究会等多数

学校法人 東邦学園

愛知東邦大学 経営学部 人間学部
東邦高等学校 普通科・商業科・美術科

所報 NO.17 2012年3月12日
発行・編集 愛知東邦大学地域創造研究所
〒465-8515
名古屋市中東区平和が丘三丁目11番地

TEL (052)782-1241 FAX (052)781-0931
URL <http://www.aichi-toho.ac.jp>
E-mail kenkyujo@aichi-toho.ac.jp